

## ■おわりに

アナ雪のエルサから始まって、「サウンド・オブ・ミュージック」のマリア、任侠映画の高倉健、寅さん、三島由紀夫、寺山修司、ジョン・レノンと実母のジュリア、森繁久弥演じる森の石松、山田洋次に大島渚、若尾文子に小沢昭一、今村昌平に小津安二郎…。特別支援教育精神という角度から眺めるなら、なかなかどうして、みんないい、のです。

さて、この一年、映画は悲鳴あげています。キーワードは「戦火の中の子ども」。イラク戦争時の伝説の米軍狙撃手を描いた「**アメリカン・スナイパー**」(2014)で最初に標的になったのは子どもです。次の標的はその子の母親です。アフガニスタンでタリバンと戦う米軍偵察部隊の顛末を描いた「**ローン・サバイバー**」(2014)では、偶然出会った子どもを含む農民家族を皆殺しにすべきかどうかという問題に直面します。第二次世界大戦末期の米軍戦車部隊の戦いぶりを描いた「**フューリー**」(2014)では、最前線兵士として送り込まれてきたドイツの子どもたちを殺します。

第二次チェチェン紛争(1999)に材を取った「あの日の声を探して」(監督/ミシェル・アザナヴィシウス)からは、こうあるべきだとするビジョンをかすかに見えてきます。9歳の少年ハジは、ロシア兵による両親殺害の場面を目撃し、声を失います。心的外傷による失声症です。一方、ロシアの若い兵士たちは遊び感覚で人を殺します。本作は、双方を同時進行で描き出し、人間の可能性と限界を露わにします。

注目すべきは、ロシアの普通の若者である19歳のコーリヤが「殺人兵器」と化していくプロセスです。ロシア軍に強制入隊させられたコーリヤは、当初、兵士の自死に際して落涙するほどの共感性を有していました。しかし軍隊は、ひたすら上官から殴られ、罵られ、それまでの自分を全否定する場。ある日、コーリヤは何の落ち度もないひ弱な兵士を殴り続け、意識を失わせ

ます。そこで初めて上官から誉められ、承認要求が満たされます。弱者をいじめることはもちろん、弱者に対して残忍にふるまえることこそ兵士に必要な感性なのです。かくして、侵攻先で、農民であっても子どもであっても、こいつはテロリスト、という論法でためらいなく発砲でき、殺害場面を笑いながら動画に収めることができるようになります。なるほど人間は、かくも容易に「非人間」に移行できるのです。となれば、ここは性悪説に立脚し、日本国憲法のごとく法で縛るしか手はありません。これこそ本作から見えてくるビジョンです。

\*

本書は主に、『総合リハビリテーション』(医学書院)、『みんなのねがい』(全障研出版部)に連載した拙稿をもとにしています。『総合リハビリテーション』編集部の川上真理さんの応援はもとより、同誌連載の高橋正雄先生による『文学に見るリハビリテーション』からハイレベルの刺激をいただきました。1993年から22年にもわたりスペースを提供してくれた『みんなのねがい』編集部のみなさん、同誌に海外の障害者映画情報を提供してくれたイメージ・サテライトの中橋真紀人さんから力をいただきました。「**タリウム少女の毒殺日記**」や活動弁士付き「**忠次旅日記**」の上映にとりくんでくれた札幌映画サークルの面々には頭がさがります。国定忠治は人民闘争史およびハンディキャップ・ファイターという角度から取り上げるべき重要な人物です。

表紙デザインは、子育てと地域づくりの語り部として活躍しているさやまはるこさんにお願しました。表紙からさやまさんのほとばしるエネルギーが伝わってきます。編集担当の圓尾博之さんの疲れを決して表に出さない仕事ぶりに助けられました。ヘロヘロ状態の筆者をいつもなんとかしてくれました。応援してくれたすべてのみなさまにこの場を借りて感謝申し上げます。

2015年7月 「映画ビリギャル」と「海街diary」を見た翌朝に